



岷江入楚

善策下  
亦世也

特別  
~ 12  
4604  
34



45  
4/2  
4604  
34



若菜下

四十一歳

赤門曾母左衛門女三宮為病車

三月廿日六条院弓會事

赤門曾系春文申女三宮古猫給車

同愛猫給車

螢兵戸姫嫁其木拾姫君給車、御妻左衛門の御子

四十二歳

四十三歳

四十四歳

四十五歳

四十六歳

此卷初云を以てて、月々を以てて、此の御位  
よりを給て十八年、其の給ぬと、冷泉院、其位より  
給て、このより、十八年、其の給ぬと、冷泉院、其位より  
給て、このより、十八年、其の給ぬと、冷泉院、其位より

小江文庫

三月十九日女樂事  
春宮受禪事 今上是也  
左政大臣出使任左大臣為攝政事  
賢皇左大臣任左大臣為攝政事  
六条女御出版一云立坊事  
夕音右大臣任大納言事  
十月廿日六条院任左攝政事  
女御殿對上回車事  
明石御方屋上又日車事  
女三女御二所行事  
紫上養明石御版女三女給事  
花散里養大將藤典侍版三女給事  
為明手朱雀院女十御賀人習事  
德氏身友取琴女三女給事  
今産  
年十七歳

今産  
年十七歳

二月十九日女樂事

明石上琵琶 紫上御琴 明女御琴 女三女琴

御方之花御事

源氏君与夕音大拍音曲事

其夜源氏君渡紫上對給出拍音事

人御事 給事

紫上出より 廿七日かひりより 三月九日相違あり

まこと八日十歳より給事

夕方後女三女御事 給事

自曉方紫上痛胃給事

御賀延引事 二月中不出版事

三月紫上後二条院給事

未門宮任中納言嫁娶朱雀院女二女事 為紫上女也

御門者相詰小侍從君事

四月十余日御禊衣夜御門者密通女三女事

祭日御門者独吟音事 為紫上事

六条院渡女三之文之日紫上俄又送入仍立内侍事  
物瓦出現事其紫上是前云也

紫上亦受戒后額髮了

六月比紫上少發事

女三之文自四月比懷妊

源氏渡女三之文内侍事

内侍等文小侍從存見女三之文則極苗端事

源氏求麻之次見付苗端文

源氏渡二条院事

小侍從源氏見付文事源求内侍事

源氏又渡女三之文給事

二条内侍上出家事

源氏也文有反事

朱雀院亦賀依女三之文而愆十月又送川

山内内侍送文女三之文事

十二月十余日御賀試示事

内侍等病不幸源氏不給事

内侍等試示未終不出病性事

内侍等離女三之文渡又入内侍事

明石内侍又生男之給事白文也

女今日御賀事





をぬく其のりしり

徳、日本の我々、福の祈い、きり、富のむら、

そのわりののの文

女三乃亦ありのの花也

殿上ののり、とあり、

殿上乃射三月の制も、

停止せしれ、とあり、

記、是日の、とあり、

時、乾健の系、とあり、

儀、より、とあり、

の宴も、とあり、

行、此、とあり、

高倉院、とあり、

西宮抄、とあり、

居、一、とあり、

座、召、とあり、

主、射、とあり、

李、王、とあり、

賭、り、とあり、

母、后、とあり、

又、とあり、

停、止、とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、

とあり、





木の滝よからまどぬ

大やけおの停止なりになりて慮り世事一何ん

初若菜上乃来は梅の夕音は柳のやがらんまのぼ

るけけりて夢の折すこまをまいれとの絵の障り紙を

かこつてつ月ののらまこらりせいでまのりふとこころ

りさぬあわけ詞ものまゆへててけ次よおらとれり

何射也右今まよよとらまをのそ夜がうけとあらは四

長く長まつりうら詩よの国案をと他説をまね紙いす

的射よりへていつる

たが大将よりあきし

鬪里夕音くまのりくひのたのましくいいうりま

十けいおれの中わね

こゆものりけりまどらめこのとくれいる上よも

何射 騎射のゆき射りゆき 何射 和右加知由夫

李太尉弁射法云夫射以自先領其特心射之

今安持心者の右平

李平王記兼平三年三月十六日殿上侍臣於朱控院弁射

又天曆四年十月十五日試春宮擬常平指亮以下類試先

試騎射次試弁射

何射 何射 何射

何射 何射 何射

何射 何射 何射

何射 何射 何射

何射 何射 何射

何射 何射 何射

何射 何射 何射

何射 何射 何射



人よれんつるん

人よれんつるん

右人詩冊ニ批註をとりよひてその慶應と云ふことと照つ

てはまゝしゝこと人よれんつるん

これ~~は~~つるん

猫尻の事と云ふ事と云ふことと云ふことと云ふこと

女流の市と云ふ

弘徽殿へ 柏木の花中

わが流才ならい

鬼やと云ふけれど尻はれまゝしゝけりまゝと云ふこと

ゆくりふあやしく

女三女のよしと云ふ女三のよはるあはせし

私ゆくりふあはせしと云ふ事と云ふことと云ふこと

と云ふ事と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

おひらるる

おひらるる

女三女のよしと云ふ女三のよはるあはせし

私ゆくりふあはせしと云ふ事と云ふことと云ふこと

あはせし

何無論 勿論

東宮女三女よはるあはせし

さうらのの流あはせし

女三女のよしと云ふ女三のよはるあはせし

さうらのの流あはせし 柏木の心

小右記曰長保元年九月十九日者内裏河内産猫産子猫たは

右大臣有産養子有衛重玩飯納言之猫乳母馬余婦

時人咲之奇怪事之天以自若是可有微歎未同禽獸用

人乳哺乎

寛平御記云寛平元年 朕因時述猫消息日驩猫候た

十貳原精袂満来朝所献於先帝愛其毛也之不類余

猫之背後星也此猫深里如墨烏其形容要如韓盧長

尺身寸高六寸許其尾也小如椎短其伸也長如瓊之眼精日

明然如針芒之乱眩耳鋒直豈如匙不探其伏卧時同田



けふおしーしうふ

春まの詞

ちれんまらふたふん

柏木の祠描は主役とある地と

まゆらどもさうねらと

これよりあさりう描ものれんははなれんを柏木の

一福まらふれども多まねねをまらふれがまらわらも

らんといふまはけはれい

人げとあらわ

描の次第はあはれ

ねくといふとらだけ

描の字は音ややね五音道はなりとも成る

てすすむれとら

ういすすむら

描の事んすむらすむら

我れりいれすむら

お描りてはなれんを柏木の  
うたすすむら  
いへんやまむら

柏木の事んすむらすむら

かきぬれりてはなれんを柏木の事んすむら

これとむらすむら

唐武宗時宮妃後身は描事あり

まらりてすむら

表まらりてはなれんを柏木の事んすむら

左ちねとらとら

大ぬの事んすむら

ちねの事んすむら

右ちねとら

うら音りてはなれんを柏木の事んすむら

かまの事んすむら

かまの事んすむら

かまの事んすむら

うら音りてはなれんを柏木の事んすむら

かまの事んすむら

さぬとをりし御むつら

ぶろくくとりし音実の兄弟あつてさうさうとくしなれり  
すはるるりりりらとくし

おとこ君

舞臺こむくくはた切りりりらとく

この御むつら

ぶつりりの御服よの女子おきく

またしらの作表紙

しとのお方のくくは表

おかしなまを

おア郷えの ばあじ父

け表紙くま

みこの御おひ

先帝の武ア郷えのり枝表紙の母の父

この文の御んも

武ア郷えを時の権ひ也

この院大版

舟徳成 後江の大に

大おもさる世のりさ

舟徳成

いれ表のたけ

つうまはけても表本表の表おひとけらとく

もし表のちをあやしくいり

表本表表の母地のけのり

おしりの御あたりり ぶらりらとく

手まら表の表のり

おひまれいとあ 女堂

おひりげらすとともまことひり

おうらら表とりらとくしりすをとく

さうのりやあまうり

さうりらとくまららとく

このまらりまらとく

武ア郷えのりりらとく

大なるたの

美亦アツてあし

因亦アツての室に花の外祖母

松根園大の系不家亦アツて昔アツていふまゝにわかれ亦アツてあし

大なるたのりとも女亦アツていふまゝにわかれ亦アツてあし

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

いふまゝにわかれ

松葉高ぶつ小のたまふと亦アツてあし

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう

わらうわらう



うき世と  
かりいん  
植桂堂ノ  
物語ケル  
中ノ口  
カニトラス  
カリ

又家

母君もはとそしごと

叔母の君の君の安母

大将もはれむし

毎志乃んし安めむし

君もはれむし

人の名

くだのりしける

必し昔アツメのありし

のつれも

うれむし

れむしつもの申し

今もいふは何し

うらむし

いも柱も

毎志の合點

あはれりし

必むつ

せし

必むつ

れ乃君の祖母

れ

い

い

い

い

い

あ

い

い

い







常花物流をいさう

冷泉流乃をいさう 秘林好

御へるくつていさうをいさう

弄林好のんよほ氏のうきうきいしり御へるくつていさう

流のみよと秘冷泉流し弄冷泉流と糸流し御へるくつていさう

いぬ君の御へるくつていさうと御へるくつていさう

みよの御へるくつていさうと御へるくつていさう

大よ乃せし

秘ゆよと大切し

ぬいの上れ御へるくつていさうの徳又執

御へるくつていさう及いし

御へるくつていさうの御へるくつていさう

いさうの御へるくつていさうの御へるくつていさう

~~~~~

世は業乃ん御へるくつていさう

御へるくつていさう 秘源乃御

いさうの御へるくつていさうの御へるくつていさう

御へるくつていさう

世が法よの御へるくつていさうの御へるくつていさう

御へるくつていさう

又いさうの御へるくつていさうの御へるくつていさう

つりいさうの御へるくつていさう

源の御へるくつていさうの御へるくつていさう

女弟の御へるくつていさうの御へるくつていさう

御へるくつていさうの御へるくつていさう

御へるくつていさう



大臣の御座り

右大臣の御座り今二人は右大臣の内大臣の御座り

まゐり人の御座り必花巻の御座り

左大臣の御座り右衛門の御座り左大臣の時奉の御座り

けりて倍従といふ人といふ二人は倍従といふ各一人といふ

倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

加倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

舞の倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

陳といふ人といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

柔回言東遊の御座り加倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

一助今世といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

諸人皆諸大夫といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

才取候といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

二倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

司此官人の御座り倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

かゝるいふ言出司に様同々倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ  
ふむいふ言 一各倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ  
二字といふ人といふ倍従といふ人といふ倍従といふ人といふ

加倍従二人近衛司御座り

必加倍従といふ諸大夫の御座り

再加倍従といふ近衛司の人の御座り

花佛神楽といふ皆出束の百人

必倍言といふ御座り

弄舞楽の人の御座り

内春の院

内今と春といふ御座り

馬副隨身 小舎人童

同といふ人の御座り

一各南時ト申候といふ人の御座り

馬をいふ侍  
すまふ御座り  
こゝろ御座り  
も申候御座り













忠いすむいしりうくかめく

神宗なりてよ其う顔色を或云氣と合うと世指し

神宗の勸告のありぬ

神宗なりて神宗より人の面

庭火しけとありしころはれしと

神宗有子歳早歿

先さいさいさいやみせのさいさいや

庭燎 四声字苑云燎尸照久 和者余波也 神宗有子歳早歿

らよと一夜し ね河海りうり不用

うへのうぬの多くけらぬ

四位紫 五位緋 六位緑袍

四位の位しり

あといのかりけりて 獄て覆

おまのかりけりて 獄て覆

獄て覆

きううごらうく 後言 いろくえらぬ 女房をれらぬ

とつういんじん 神宗

うらじのせ

通度 あまいつうのよは

といつういんじん 獄て覆

かりういんじん

乃入道の

このは君朝ののしん甲と

あまのいんじん

あまのいんじん

あまのいんじん

あまのいんじん

あまのいんじん

あまのいんじん

長根を傳曰  
男不封後女  
作妃若君  
女却為門  
楯其下  
此  
大妻慕如

世中の人れをたゞしき 又女子比

るべの子細しゆ及て世男の人れらるる人可成と  
めりてあはれ 因 世俗は物とわさるる事ありし

らじのりとのを仁君

ねらめらるる事ありし

入道乃みま 玉 朱雀池の四より 松 并

内の内よりし

今上の内政を し ころびならねあし

と秋のりき 必 朝勤行幸也

は は 秋のりき朝勤

孟子曰天子適諸侯曰巡狩 者 巡所也諸侯朝於天

子曰述職 者 述所職也無非 者 春有耕而神不

足秋有歛而助不給

いぬまのり 女 也

と 美 葉比の

は 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

二 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

女 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

親令 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

田 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

は 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

二 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

同 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

た 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

世 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

人 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

け 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

世 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

あ 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

第 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の 必 葉比の

はししきやうき

必世ののりこいぬし

内のみ

必女とまのいづり内のみ

あしき

あしきあしきあしきあしき

手女とまのいづり内のみ

あしき

必世ののり

東家のいづり内のみ

必中家のいづり内のみ

つねに

必中家のいづり内のみ

夜のいづり内のみ

手女とまのいづり内のみ

あしきあしきあしきあしき

あしき

必中家のいづり内のみ

あしき

源のいづり内のみ

右のいづり内のみ

必世ののり

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

朱雀院のこむじげよふりく弄とつとをふりく

朱雀をせしむるありしは

ぬいめんらんりつてい

女と女の心ゆりし

朱雀のつくねとありしは

けしきふりく

朱雀の四方女とまうりつて

ついでつて

ついでつていしと原のかりし

このついでつていし

今年朱雀の四年に十九し明年の

原のついでつていし

けしきをいし

朱雀の

朱雀のついでつていし

朱雀のついでつていし

朱雀のついでつていし

白氏文集十三年末生對し唯将

韓康伯曰酒曰吾防婁

火と式式曰吾編片膳

菅原沖集と紙畧生畫梅茶種行

人の心をいし

右大夫の心をいし

大將乃西子なりし

夕雲方の西子と人の内曲は

夕雲方の西子と人の内曲は

夕雲方の西子と人の内曲は

夕雲方の西子と人の内曲は

皇孫王









しらぬやと

衣裳木からしらぬやと... (略)

まのm...

あ...

青丹... 漢青... (略)

一玩緑青... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

右の夫... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

御... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

... (略)

かき(のら)〜

手に裏くらの(ら)〜

花(のら)の(ら)〜 弄梅(のら)〜

梅(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

梅(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

松古(のら)の(ら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

ら(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

手(のら)〜 (のら)〜

手(のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

ら(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

ら(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

ら(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

い 叢の(ら)初(ら)と(ら)〜 (のら)の(ら)の(ら)〜 (のら)の(ら)〜 (のら)の(ら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

は(のら)〜 (のら)〜 (のら)〜 (のら)〜

物のいさへ

手よきいしのいさへ

すしあつて

すしあつて

すしあつて

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

皇平記

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日

二月十日の十日



女はまよとあられり

は女威陽に氣春思男感懐に乳秋思を

いるこゝろに

必原氏の如し

いりてり人の心

弄沛長

何と秋の勝負の

昔

ねび

も秋

けり

あゝの物

曲

平の律呂と

呂律と

あゝの物曲也 日本に呂律と

と云陽

手

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

女



うららかにしめしむ

弄むるにいとほしきことありて

ねんるにいとほしきことありて

あやうきことありていとほしきことありて

まらぬことありていとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

弄原はのほのほのと物にいとほしきことありて

ねあはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

うれとらんことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

夕暮のほのほのと物にいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて

あはれにいとほしきことありて



琴乃人犯之

白鹿通曰 琴者禁止於形氣以正人心

琴曰 曠三奏而神物下降何琴德之深也 馬蠲琴賦

私助 琴賦 莊康 五世文馬 助作苗賦 仲賦 五世

文若他賦之在 一助 五世 莊康 五世 助住 不知 誰人 所作

琴乃人根原

私助

天地之氣

琴動天地感鬼神 私助 海之入 琴乃人 琴

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

琴乃人根原

五音得失



ある所のめりく 大なるのつりくも計とく

あまのつりくも計とく

日本紀（字不変）現在書目六 友佐世撰

樂家（四三）琴經二卷、友伯嗜撰 樂曲四卷、

琴探三卷、（相行撰）晋書（後）琴法二卷、趙耶梨撰 琴録一卷、

琴法譜五卷、雅琴譜百寸卷、（琴用）法二卷、

彈琴法二卷、雅琴手勢法二卷、 既成曲一卷、

師とす人たる

手（手）とす人たる

はるるしを師とあり 祖師とを師 独悟の人とあり

しつりあれし目録す

あつらひの人なるあつらひし 是と古人相當

との後とつしてつりくも計

はほ氏の弟とつてん 意用の人とつてん けのめり

大將けのめり

夕音のね張せしむ

夕音つてんを

みりみ

必 必 必

りしとあり

必 必 必

今とつて

必 必 必

手 手 手

はりの山とつてん

手 手 手

はりの山とつてん

はりの山とつてん

はりの山とつてん

はりの山とつてん

はりの山とつてん





いづれもさうし

紫のむすめ第うつねとよとよめ

しんぶんがとれ

紫のむすめ第うつねとよとよめ

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし

いづれもさうし



君乃湯身

世よと

かめりしものまは

まはのこころ

后とほしきと疾妬のこころおかしき事なり

あやふきれしちかき  
ほのまはれしき世よとなくらむこれなり

うれしき人ますりしころ  
疾妬のこころ物とらふせぬしほの目極

こころのこ

世よと

こころのこ

世よと

ほははれしき世よとなくらむこれなり  
うれしき人ますりしころ  
疾妬のこころ物とらふせぬしほの目極  
あやふきれしちかき  
こころのこ

世よと

世よと

世よと

世よと

世よと

世よと

世よと

世よと





ふんたにわし〜

世のついでにわし〜  
世のついでにわし〜  
世のついでにわし〜

君〜

私君の〜

私源乃詞〜

美〜

い〜

私物〜

美〜

私女〜

女〜

り〜

美女〜

美〜

私源乃詞

物の〜

源乃詞〜

日〜

白木の山樞古〜

美〜

私〜

か〜

昔〜

美〜

仲〜

〜

〜

〜

〜

因〜

あ〜

私源乃詞

けよの娘いつるや

おあよ世よとらうらまの人の娘い

人乃一のいさく  
お女の力ハ嫉妬弟一のおおひるは

御むしひをまや  
連ニ胸中よそのじもりれ

御せうくいまあさ  
原の女との方よふくつけ

ひんたき  
世上の月まき可特る

川力とあつらみ  
河津集  
人しむあむりつる人あわねあま

院  
原のまう娘い  
女弟のいりりいせ  
女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い  
女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い  
女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い

女弟いまうい娘い

秘朱雀院

おとしの娘は

病人おとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

院の

おとしの娘は

業上よりおとしの娘はゆるゆると病に苦しむ所着業上よりおとしと申す院の

しつゝのつらういふうら

吳明石中ま版のつまらぬ又白くまらぬ **吳** 松葉アリ女つまの

うら 水三九十五子病状為女一ましゆらに運思の符合

必女つま 相あか女つましゆ一変て男と思ふと符合トアル

道遠流ノ身

**紫の句**

引くはれつと

みんこのつと

東原氏 裕因

松叶一版皆ほ氏の句とみらる

けしつゝのつらういふ

必 大つとつらういふ

を つらういふ

必 貴上の徳あるつとつらういふ

小取季小得福大取季大得福 善至徒要道篇

帝靴日盛牛う昇不可履以烹雞捕鼠之狸不可使

斗背之粟何大取小之量輕非重之宜

つらういふ

行老子注曰柔之勝剛 古柔 古剛 天下莫不知 知柔弱者久 長 剛弱者折

何夜香

源乃沛之由也

源乃沛之由也

はとや信の磐石納らぬ

必 しつゝ 柏木のつとつらういふ

つらう

いとめれ人なり

必 時つらういふ

必 女つまのつとつらういふ

必 女つまのつとつらういふ

柏木のつとつらういふ

柏木のつとつらういふ

下野の更夜さら

又更夜さらさら

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

人あし〜

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~





又小侍後乃初也

根下の宿世字入り

根下の宿世字入り

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

初院此

うふし〜ま〜

美小侍従うふし〜婿のり〜

〜ゆ〜 何撮極〜

私今のせ乃世俗〜

〜わ〜

私柏木の岡

〜私〜

兼后〜

何五条二条后兼平胡后〜

後撰〜 京極の皇女〜

私 女、俺おれ〜

二条后を〜

美 兼平后和女清〜

〜

私 女と〜

〜

私 兼上〜

院のあ〜

私 院とは朱雀や

あま〜

は〜

私 明石〜

世中〜

〜

私 小侍〜

〜

私 小侍〜

〜

私 小侍〜

〜







柔葉早二条后を具したるもろくもゆるり  
は寝遊は寤坐睡因はは寤坐もゆるり

必懐妊乃申也

いてるもろくもゆるり  
いそめとろくもゆるり  
いそめとろくもゆるり

必腹中なるもろくもゆるり  
ま腹中なるもろくもゆるり

私花巻の葉しかりろくもゆるり

れくのこれぬ

私女と乃ら申也

人の御儀とて人の御神

河下官裳ノ神と娘と村淡ノ遊は寤坐

必りりろくもゆるり

私柏木の詞

柏木の詞也

柏木の詞也との山言もろくもゆるり

必思れ方とゆるり

いすすゆるり

私命とゆるり

私命とゆるり

うれしうつゝ

あふれしうつゝ 女このる

うのうめしうつゝ

うせしうつゝ 柏のすしと女のあふれぬるなうつゝ

あふれぬるなうつゝ

猫のあふしうつゝ

猫れみしうつゝ 猫のあふしうつゝ

いよあうしうつゝ

意と懐妊のあふし

夫猫のあふ懐妊のあふし

秋のあふし

物不 必は月るれを也 因

あふしうつゝ 柏のあふし

あふしうつゝ 柏のあふし

手 三徹うあふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

いふのてあふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

後撰三といは 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ

あふしうつゝ 三徹うあふしうつゝ





みしほのちとらわやうらうら何妃日本記御書目札

女帝いづれの類れしや

くくくかかむ

これいづれのあまの

まにちり

美女帝うらわらうらうら罪のあまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

ういひいひい 女にけいけいけいけいけいけいけい

てらうらうらうらうらうらうらうら

久しくうらうらうらうらうらうら

因原のんやけの類ゆらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

か乃田らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

久しうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

業と如うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

こ乃けいけいけいけいけいけいけい

原の女にうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

女に乃んやけの柏木のゆらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うしれま

申うらうらうら

まうらうらうら

右串の巻や

柏木のゆらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

まうらうらうら

あしうらうらうら 物んやけいけいけいけいけいけいけい

なうらうら

柏木のゆら

女に乃んやけいけいけいけいけいけいけい

まうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

まうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

柏木のゆらうらうら

くわうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

柏木のゆらうらうら

柏木のゆらうらうら

女に乃んやけいけいけいけいけいけいけい

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

人か乃田らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

女に乃んやけいけいけいけいけいけいけい

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

はうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうら

女に乃んやけいけいけいけいけいけいけい

物不

しつゝ落葉とてふらひらひらとあはれしや  
必 落葉のうらや 世三よと落葉とて六兄弟をれんやと  
しつゝ落葉とてふらひらひらとあはれしや

葉園りらうらうらとて六葉の二葉をれらうらうらとて又 院桂と奏  
しつゝとてはもととて 落葉と何よとてふ時 院桂と  
しつゝとてはもととて 落葉と何よとてふ時 院桂と  
まよとてえぬりしとて

奏桂れうらうらとて落葉とて二葉とてふらひら

いとるめけるる  
必 多よ子作し 葉園

二葉をうらうらとてけるるらうら  
あうらうらとてけるるらうら

源のうらうらとてけるるらうら

二葉院へえらうらとてけるるらうら

業れ儼し後入のめや

けしつゝ院ハ

いしつゝ院ハ

典 曲のりれん

はらうらうらとてけるるらうら

葉園 是ハ不巧れ護持信者音をうらうらとて 院出せは有  
院の院はうらうらとてけるるらうら 院とてけるるらうら

うらうらとてけるるらうら

ふらうらとてけるるらうら  
必 ありらうらとてけるるらうら

不動寺乃りしとてけるるらうら  
本誓

河大般若経曰 定業亦能轉  
正報畫者能返六月任 不動義軌

金剛手光明灌頂経曰 世号不動立印軌 復次觀自身成

就尊形状一百由旬内 取有難調御鬼神 一持持者皆悉  
能敬懐

典 二葉院也

河 院とてけるるらうら

必 定業亦能轉のんや 行はよみしり

善元畏三歳之師欲滅才子為受灌頂善元畏行世  
法未受灌頂也 去後於延年此より  
兼因能延六月任ト云ニ付ク能延六月の法ニ依テ  
人よ六の玉一のわりと云玉と一月よつと云り六月は  
と云やそれと云る久法実なる能延六月といや

これ白子と云

この能延六月の法ニ依テ白子と云るは  
と云りぬる

兼因原の業よと云れぬる  
仁

原の熱傷の原切るを仁のあはれと云  
や

業と云後と云るは

いふしりてうせられ

兼因お持ハ今剛傳うと云る酒伏也東寺ヲ調ト云

て

物のけと調

おろ

矣む

命

原の命と堪

い

兼因西恩處

美所見

い

今生みこれ物

れ

物

必 養と乃時也 物のけはゆ也 兼因



いりすいり

田舎の心をと人々ふくむる... 業の層を... 皆冥に通する

妻弟具不乃心仲よ... 必悪鬼をよるれ... 病之の

私に系い... 必私ノ系... 必け系い... 必け系い

必け系い... 必け系い... 必け系い

必け系い

必け系い... 必け系い... 必け系い

必け系い... 必け系い... 必け系い

必け系い... 必け系い... 必け系い

必け系い... 必け系い... 必け系い

必け系い... 必け系い... 必け系い

必け系い... 必け系い... 必け系い





くつひあつるをさくはしむ録つれく

必世上一乃柏滅の事なりしありて

私柏木の心くつひあつる必世上一の心を結ひて

ま乃心かほし乃ありて人乃よをゆきむ録つれく

可ら乳いし極あてしけ乳あふうさせまう

兼奥入物りなりしをせしむし乳がそく極

或尸つてま 必世上一乃又也

大将也

必世上方 必世上方

毎くろくつれぬるや

柏木用材の細

いとかりくるり

もつあや

柏木用材の細

くつれつれ

必世の上

とりつれ

源乃河重病也

むつれ

女房

かゝるりのら

必世上方

あふくは

の悲木

くやま

必花

てい

くつれ

柏の

くつれ

いふいふのいふ

業乃履生乃ゆて

うつし人しつた

業現乃時ふて

必源の心入御具不らうつ乃時ふ親のまうまう

せうらうあやしき

いひりくくのけの女乃力

又女業障ふくも漫槃誑くもくまう行海よみり

何有三千界男子諸煩惱合集為一人女人為業障

女人地獄使能新佛種子外面似菩薩内一如夜又

漫槃誑の義載

山くまういづ

源の業とのしつ物くくも業とつ合をぬい

湯泉下の心はゆとむくくくくくくくくくくくく

沸くくくくく

業とふいふけくくあや

あついでりうんせ

業因五戒は沙弥戒也不及十戒

五戒龍王誑一日一夜間持三歸五戒人生天中取守羅

又持五戒人丈五神王被護又以清淨一合皆不生他

念人者今終時主日摩尼天誑音

要法文曰言五戒者具優婆塞世云優婆塞世云近事女

沸くくくくくい力強

業乃引くくくくく源くくくくく

ふくくく

業中随ふ乃智人十賢人十雜儀よ及ふ対こ

めくくくくく源とつる

いづかきくくく

業主君も不助親服も替也

御くらしすし 源乃沸るはや

お月ハなるこまきしてまねくくね

兼宗ましてとけける面白くもくくねお月西の静ヤ

物乃けのつこ

沸具お乃とふくひ

沸まらうらうらうらうら

兼宗と枕とのりくくね

ふんのこくくね

兼宗林の中も糸と糸流の中も糸の後強くと

け強ハ大般若 最勝王 法花強木也

おろくくくねくくね

弄物の氣也

るらうらうらうらうら

兼宗と物とかりねうらうらうら

こいぬふくくね

兼宗が念ふもくくね

うらうらうらうら

兼宗うらうらうら

れいし

兼宗はあはるもくくね

糸流のあわうらうら

源乃女と乃沸方兼宗の病のえかかせね

いぬまいあや

兼宗と女と懐妊也

うらうらうら

これとお月とふくくね

か乃人か

兼乃や

兼宗女と女と

兼宗柏乃とあはるもくくね

兼宗うらうらうら

院とくくね

兼宗





きい乃はるね

必 沛懐妊で美

あや〜くわ〜

必 原の心で私秘てり〜清り〜

中程〜業中程〜

業田子乃おま〜

う〜不実ぬ〜

中明石中〜

〜

私秘〜

業上〜

〜

〜

業上〜

不定〜

〜

〜

業上〜

二〜

美ぶつ〜

〜

業上〜

〜

業上〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

必 柏木〜

〜

必 原の女〜

女にあらはし

業上乃かきせしほの對し

なま

人まきりくたれ

人乃すまひや

むつしきわ

女と乃福文の

えしきり乃し

ちの又言のしきりしきり人のまきり

ぬしきりしきりしきりしきりしきり

あしきりしきりしきりしきりしきり

私しきりしきりしきりしきり

いしきりしきり

業上乃かき

ゆめしきり

女三のちしきりしきりしきりしきり

あしきりしきりしきりしきりしきり

あしきりしきり

私女と乃福文

原也

いしきりしきり

あしきりしきり

月まきりしきり

月まきりしきりしきりしきりしきり

女と乃福文

業上乃かきしきりしきりしきり

あしきりしきりしきりしきりしきり

えしきりしきり

女と乃福文

業上乃かきしきりしきりしきり

あしきりしきりしきりしきりしきり

えしきりしきり

業上乃かきしきりしきりしきり

あしきりしきりしきりしきりしきり

業上乃かきしきりしきりしきり

原也







いまもなごころをなごころと  
必世上一平愈なる物とて

女三乃のれ申すつひひなよとらけは茶乃平服あつる  
よのこころとつくりあふと皆人こやもつすつて  
かこころなるふころ

源乃柏の文と不審しおはせ  
申袖を乃てつくりつるもの  
美さあぬ女房れはるるるる

必世乃大輝とつくりつる  
いしつる

必源乃夕魚の上乃文のつくりつる  
ぬりつる

又源乃乃美は勝月夜乃つくりつる  
美さあぬとつくりつる  
つくりつる  
必源乃つくり

世人の柏乃つくりつる  
必源乃つくり  
人つくりつる

必源乃つくりつる  
つくりつる

秘自然つくりつる  
んつくりつる

必源乃つくりつる  
秘柏木

必源乃つくりつる  
つくりつる

河五條后冬嗣大臣女に明后二条后  
中納言長良女通業平中將  
清和后

花山女御元方氏アツ女通小野宮用白并通信中将藤  
三條院后

景殿女御法興院入道女美香殿顯克大臣女上二人通右兵  
三條院

かこころとつくりつる  
必世女とつくりつる



あるうらむにたかさんあり乃

業としか朱雀今上乃ゆとけて了

うめさいめつ 業荒 歎もろくし歎く

源乃さゆいあま子人地といふまじりし源の親

内乃さしめしりしりしりしりしりしりしりし

必業上ノ詞

字今上乃味畧るるもそりめんりしりしりしりし

業乃赤く物

とれさしりしりしりしりしりしりしりし

妻女とそめのみりし

女とつる入孫守り人乃りしりしりしりしりし

けしあるしりしりしりしりしりしりしりしりし

必源乃同深切よるるも人の助言しりしりしりしりし

回と乃弟にりしりしりしりしりしりしりしりし

中乃人乃為るる回王にりしりしりしりしりしりし

おわりの人とのりしりしりしりしりしりしりし

此の國と乃弟にりしりしりしりしりしりしりし

一の孫ひるす 妻仲らう人ゆかりありありありあり

私に足れた業に 弟にりしりしりしりしりしりし

黄のけ行上  
私字付録

しりしり孫にりしりしりしりしりしりしりし

必業上と糸院にりしりしりしりしりしりしりし

あしりしりし

必業上と一乃同業

しりしりしりしりしりしりしりしりしりし

源とと糸院にりしりしりしりしりしりしりし

日くろくね

栗くの孫ひくつてはたけら孫子

いぬまはくはくは孫おね日くろくね

葉とれは葉乃日くろくね

より沸てこころ

葉とれは南乃日くろくねは

女と乃日くろくねは

院とこころ

心朱雀院乃沸あや

か乃人

か乃人乃文とほ氏の孫

いあこころ

ありあこころ

うよめつこころ

何天眼乃ゆり隠密もる力と何知く天地人の

天乃昭魂の弟つ也

胡夕すこころを此るれ

何夏乃日と物夕すこころを

葉不及川乃と弄字木用川弁秘下はる

力とこころ

弄松そりこころを

を力とこころ

こころは乃とこころを

こころは乃とこころを

かひてこころを

かひてこころを

物とこころを

いすやとこころを

柏木乃日くろくね

鞠の対乃

大将乃三つ

集夕音指乃時色つらつせしむあり  
とわらうのむら

業これより系子に地字

よきやうにしてありり 弄柏の業尻のこゝろあり  
女ころれ湯身はくやうるがをるゝはく女とわら  
かたはるゝのこゝろ

世乃わらはくしとる

業世回乃地はくしとる

つらあぬ人

かひつらあぬ人とをくぬいさるや  
かりののくも

業懐妊のゆゑ私只女と乃湯身はくしとる

はく遊とつてはくしとるはく女と乃湯身はくし

くはくしとるはくしとる

源乃女との再會ありとわら

くはくしとるはくしとる

はくしとるはくしとるはくしとるはくしとる

物沈むはくしとるはくしとる

又源乃とるはくしとるはくしとる

かん

業世回乃地はくしとるはくしとる

くはくしとるはくしとる

業又とみつけはくしとるはくしとる

おろしのみはくしとるはくしとる

業女三乃席中

すはくしとるはくしとる

くはくしとるはくしとる

業柏乃又のゆゑはくしとる

くはくしとるはくしとる

女と乃我と人乃不寢するはくしとるはくしとる

天  
源乃の女と  
つらあぬ人  
くはくしとる  
はくしとる







いふことありてはよれ

か内へ入りてはねとていふれは

いふはよれ

業にすしむれは業にすしむれ

るれは

つひにせよ

秋久

業にすしむれは

とくれは

かとくれは

業にすしむれは

作らむ

けよ 明石の

わよあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

かあ

女君のしるしをいふねる

長勝月乃父と業とよみさぬしるしをいふねる

わいしるしをいふねる

手とられんとほ氏のあまのしるしをいふねる

けしるしをいふねる

必しるしをいふねる

必しるしをいふねる

必しるしをいふねる

必しるしをいふねる

か乃人乃をすしるし

業権勝二人し 中権や

和女と云ふ

私秘に女三といつる大よわや

権勝二人といつる

女子と云ふは

よくせむしるし

弄は出乃

和女と云ふ

とふしるし

必年といふし





月しつらうくわうくまらるるしつらぬよ

私原乃女三のこころをいふはしつらぬよ  
とこしつら原乃女とていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

世とて業乃娘此時ふかきれどもとて  
しつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

乃寸公いふはしつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

私朱雀此いんし内裏よりしつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

更朱雀乃いん世の人替申るはしつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

第これ中言ふはしつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

三つはつた  
浮舟物  
しつらぬよ  
しつらぬよ  
しつらぬよ  
しつらぬよ

私しつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

こころをいふはしつらぬよ

世乃道とていふはしつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

原乃女三これいふはしつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

私朱雀此乃又の詞  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

第朱雀乃此いふはしつらぬよとていふはしつらぬよ  
しつらぬよとていふはしつらぬよ

世中さしひ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ  
兼原乃誅をうもむとありてりけ

大乃川つうと  
原氏女三三三戸あふ領

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃女とありてりけ

兼原乃女とありてりけ

とららひ

女之乃誅をうもむ

物なりけり

兼原乃誅をうもむ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ

兼原乃誅をうもむとありてりけ



ゆく東のつらかりたれ

葉切ふ女流のまゆしり東のつらかりし原の羽たの翅や

とひし乃世ののこけり

葉原のなまはれに別条うへを切りまらふに

うれなき 方くんや

りらしし身をすく

私業上りり我身りらしはまをみしつてか

只女と交ひ人しとまれ

私業上りりのゆりりらしつてあつすむは散

里るし皆せをま

かりす

乃しらし

弄朱雀

院乃世乃あり

葉女三乃ゆへにふも乃あすあ

雀乃ををや

物乃救うす

つらかり

朱雀乃のあつらふす女と乃世飛よるんや

うれなき

柏木との宿あつらふのあつら

原乃とあつらふれしあつら女と乃世は

うれしうらな

葉原乃憐愁のあつらふはるくはつら乃あつら

人乃うらな

昔の人を原しむつ

とのあつら

力しら

葉老なる人を乃しららるくを身乃

乃しららるくはつら身の人にならる

とわたりらるるはつららる



らるはらふみふらん

こしらとあつりて乃あふ

こきつてまひり

秘院乃れをたや

いて乃れをい

女乃れをい

か乃れをい

秘柏木乃れをい

まひりたつて

秘院文の詞

秘と文乃れをい

とまらふ

二乃

弄乃

少乃れをい

弄女とまけ

立るい

あつり

五月のい乃

秘院乃れをい

又いこのい

私いこのい

むつこのい

因女このい

とあつり

い

業乃れをい

い

人あつり

えんよつ

秘女このい

弄原乃れをい

とすしつて又 是の源乃柏をえんよんや  
月よりまじつ流ぬとてあま

源乃どうめ流るねや

流るるはわすしるまき

私業上るやとめふれはるまきしつて

ねと人こまてかりつるや

大將乃君そわるやうしるまき

夕音いげやいたいとちあましつて猫乃時しつて

すれ物いけりてとつてしつてしつてしつてしつて

私柏木のゆり突きしつてしつてしつてしつてしつて  
鞠力(か)二(相)一

夕音のんに柏木乃女三つしつてしつてしつてしつて

しつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

てあんとつて夕音いけりてしつて

しつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

十二月はなつりまきりしつてしつてしつてしつて  
十日あましつて

ねがふ十二月十余りしつて

朱雀の流花のこのころるれうしつて

二条院のうし

私業上としかつてしつて

えんといめしつて

世といつて試すしつてしつてしつてしつてしつて

女師の君しつてしつてしつてしつてしつてしつて

お自分ちつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

つてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

弄にえん常階えん明ん中えん服 且白えんえん

けりしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて  
馬お南

私明女師のしつてしつてしつてしつてしつてしつて

二条院よかすしつてしつてしつてしつてしつてしつて

すまうしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

とがしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

しつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて  
源乃のしつてしつて

私舞は乃女方むつてしつて

大将乃君

大将ハ夕音

ていぐのや

調樂

か乃い

か乃い

手花散里也

必花散里乃

外音のも散里乃

手

乃ゆ

私事ノ系

集

不慮

て対の人

を

皇

を

心

保乃沛

ら

私別

尻

保乃沛

田原氏

又朱雀

柏木の

思乃

常

り

や

生

か

い

生

生

なすのこころしり乃

お女はなすのこころしりてね人神とて女と名もゆはほのふ

ちろしりゆはし

なすのこころしり乃

お女とてなす 柏木とて

お女はなすのこころしり乃

松原乃親弄

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃 対面

なすのこころしり乃

お女とてなす

なすのこころしり乃

お女とてなす乃し 美因

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

何月

なすのこころしり乃 但月とてはるるあるもよぶなす乃月とて

なす乃

なすのこころしり乃

月也

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

お女とてなす乃し

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

お女とてなす

松原乃親弄

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

お女とてなす

なすのこころしり乃

なすのこころしり乃

月ころろしく

柏本乃をいふ世に此とま乃ゆるやこ

みころろしくやとふりの

順和名曰醫家書有脚氣論

脚氣若脚病俗云河之乃

うつ下の地流十五原中納言嗟哉よつて強うみころろ

りやつてころろゆつてこわく業くみころろ病の惣名

をころろやつて世に三条ありころろ風をころろ

花ころろ下の癩病脚病のあまありころろ病

のころろ血氣ころろ病とるるあころろ

つころろはつとつころろ脚氣のころろ

私脚氣也只病の私名

他ありころろ

脚病をころろ

手脚氣

院乃ゆころろ

朱雀は五十五也

人ころろ

致仕の帝がわつころろ朝次の出はか

れハ脚氣

ころろ

河掛冠事端

車おたり

河古文孝經曰七十老致仕懸其車置諸廟承使子孫

監而則正而立身之終其要然也

漢薛廣行爲御史大夫九月免歸師太身迎之界上

師以爲策懸其安車傳子孫

師古曰懸其車賜安車以策致仕懸車亦古語也

つころろ

弄致仕大臣着座

私致仕大臣着座

ころろ

私秘ノ系を

下野うたのりしむわたりし

柏木のゆいたるしむゆい白しむゆい

りよるしむゆい

枝は乃すしむゆい

かもしやまひしむゆいたまげら

是ハ朱雀ハ女ニ交の幸りあひし時乃ゆい

何今日正閑天又腹可飽枝病暫米田 白氏文集

井波之及川丸

いまいあつすなるゆい

秘朱雀乃乃ゆいゆい つかのまを大畧乃ゆい有略を

ゆいゆい

朱雀のゆいゆいの新しゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

秘女ニ交乃ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい



か乃御女の日記

當日乃ゆきそくをくらひてりて

ありきこつつはほくしえいそあの下ごころ

河赤白椽 蒲葺 條下籠衣

元兼平七年陽成院七十賀舞童五人服赤白椽蒲葺

條下籠衣

をふあをいりよとてりて

河青色 鞠慶也 蕨芳重

く(取)りて

仙遊霞といふ也 院よりかすれ仙洞へ業あり調曲

河仙遊霞太食調曲 柏子十無舞古樂小曲南宮横笛譜為

宮乃いふつらるる春乃とてりて梅のきこひそあ

冬乃いふ春乃隣乃いふれはけりてりて花はらりて

ふかひとてりて梅の花かきりてりておてりて

和春乃とてりて乃とてりて

ひさし乃みものいりよかりてりて

左乃屋中より原氏かきりてりて右のけりて

なりてりて梅の花かきりてりて

御あをいりてりて

右乃大殿の口高君 権忠子とてりて版系國右弁

大將殿乃之高君 夕骨子雲井原版系國右大弁

兵部乃之高君 乃君とてりて二人

當りて二人當乃乃子系國ハつりてりて重とてりてあはれ母

河五世よりハ孫王とてりて

大將乃なつりてのすけりての二高君

夕骨ノ二男母藤典侍 系國中納言トアリ

式アマ乃とてりてりてりて原中納言乃乃子

式アマ乃とてりてりてりて原中納言乃乃子

右乃大いりの三郎君 母乃とてりてりて系國若君トアリ

藤原ノ三男母玉鬘 尚侍系國右兵衛督トアリ

大將乃の右乃高君

夕骨ノ嫡男母雲吉原系國右中納言トアリ



佛心まじりて

手孫道乃并感し

わらわしとくし

餘情をまじりて

佛心まじりて

秘を摩りて

ありし

手孫道

息し

はらわしとくし

世中乃わらわし

まじりて

秘を摩りて

ありし

息し

らねん

手柏木

はらわし

まじりて

ありし

人より

生得柏木

又両方

丹後

そら

原乃

はらわし

いと

柏木乃

まじりて

必酒

佛心

原乃







崇義也 不足信用

一説云五十寺 一寺乃名也 是又失説也 一寺云々五十乃  
佛賀乃於云々云々

天慶二年十二月貞信云六十賀大政官於六十寺修訓誦  
永延二年三月十四日法興院大入道六十賀云家今日修  
訓誦於十寺

今案佛賀乃從之訓誦 年終乃教を司らるる也  
の十乃佛賀なる也ハ六十なるは佛誦佛誦云々此云々  
まするハ仁和寺乃圓堂存乎金剛界大日乃云々此  
六十の佛誦佛誦別てハ仁和寺圓堂云々摩訶毘盧  
舎那の佛誦佛誦ありと云々此結語乃ハ奇特云々のあり  
まするはハ佛誦佛誦なるのハ故に佛誦云々云々云々  
云々云々云々云々の云々法莊子なる此書よお似たり  
五十寺ハ五十の賀よりなり云々此云々此寺ハ仁和寺唯  
仁和寺乃圓堂なり云々今剛界大日也云々此云々の云々  
行いなり云々云々の云々云々の云々云々云々

此結語古本にもあるの流あり注抄よみたり不裁也

或云後漢書迦旻傳韓康傳云是韓伯休那と云那  
字同云云云云取論云地結云發端と結語と云云云云  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
に云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

吹まうよ中風をほむと秋秋乃うつと云々云々の  
因韓伯休中吹まうよ中風をほむと云々云々

此去との一解ありけり

韓伯休云々商人之物云々云々云々云々云々云々  
云々者云々云々人云々云々云々云々云々云々云々  
と云々其乃ノ字ノ又立量云々

又乃外ノ啓白ニ物ニ神各般若ニ經大般若陀名天摩訶  
毘盧舎那云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
なと云々云々聲云々云々云々云々云々云々云々  
私云云々乃云々花云々云々一結語乃云々云々云々云々  
云々云々云々云々

弄

人乃沛具三はスル分のらいしと入る

朱雀院沛お水の後なりれんころりゆえ也

日二行礼代了り自字し時誤至し

同韓 伯休事

韓康字伯休京兆霸陵人常采藥名山賣於長安市只

二價三十餘年時有女子從康買藥遽守價不稱女子怒曰

公且韓伯休那那語餘声乃不二價平也

乃賀反



